



末廣昭ほか『大メコン圏（GMS）を中国から捉えなおす』（東京大学社会科学研究所・現代中国研究拠点研究シリーズ No.3、2009年3月、220頁）にまとめてあります。

今回の海外調査の目的は、ハノイを起点に、陸路でドーンハマまで南下し、その後、ラオスとの国境ラオバオを経由して、東西経済回廊を西走し、ラオスのサワンナケートの国境経済圏を調査した後、メコン川の対岸、タイのムックダーハーン市にわたり、さらに西走してコーンゲン市まで行くというものです。また、コーンゲン大学、同大学構内にあるメコン・インスティテュートを訪問したあとは、東西経済回廊を離れて、フレンドシップ道路（国道2号線）を南下し、ナコンラーチャシーマー経由でバンコクまで行きました。全体の走行距離は約2200キロに及びます。この間の詳しい走行距離、道路状況、国・ルートごとの時速は、助川成也氏が中心となってまとめた「ハノイーバンコク走行記録」（添付ファイル）で、ご覧になることができます。

9月30日の研究会では、まず九州大学の久我由美氏が、中国とASEANの間の自由貿易協定、中国の対外投資促進政策（走出去）を概観した後、主として広西チワン族自治区の「北部湾経済開発構想」、南寧市における「南寧国家ハイテク産業開発区」や「中国 - ASEAN 博覧会」について報告を行いました。次いで、活発な質疑応答のあと、後半は8月の海外出張組が、「東西経済回廊」の走破に関する実地踏査について報告を行い、同時に、同じ4名のメンバーで、東アジアのFTAをめぐる動きについて、「特集号」を編集する企画について話し合いを行いました。そして、報告会終了後は、東京大学大学院経済学研究科の末廣ゼミ（アジア経済論）の院生メンバーも交えて懇親会を実施し、有意義な半日を終えました。（文責 末廣昭）

荷物を満載したトラック、オートバイ、自転車がひっきりなしに行き交う  
ベトナムの国道1号線。中央分離帯は意味をなさない（2009年8月17日、ビンの近く）

ベトナムとラオスの国境ラオバオの検閲所（2009年8月19日）

タイとの国境にあるサワンナケート市にあるアメリカ人経営の巨大カジノ。顧客は大半がタイ人である（2009年8月19日）